

知られざる「島」の素顔

国難を救った水軍魂

村上水軍のルーツを探ると、その歴史は大和王朝時代（7世紀頃）まで遡るが、中でも中世に名を馳せた村上義弘がやはり有名であろう。村上水軍は義弘の時代、そして、義弘の息子が三島へ分かれそれぞれ因島村上氏、来島（くるしま）村上氏、能島（のしま）村上氏となった時代に全盛期を迎え、海の戦国大名とも言われるほどの勢力を誇った。

日本史においては、村上水軍はさまざまな場面に登場するが、世界史においては3度登場するといふ。

ひとつは、鎌倉後期の蒙古襲来だ。ふたつめは南北朝の動乱期に朝鮮半島や中国大陸沿岸で猛威を振った倭寇である。そして三つめは日露戦争において、である。

日露戦争においては、「国難には体をはって立ち向かう」という村上一族の魂が日本に勝利をもたらしたとも言える劇的な登場の仕方であったといえよう。



連合艦隊司令長官東郷平八郎の右腕と称された秋山真之という軍人がいた。当時の海軍戦術についての書物といえ、日本人が書いたものなどなく、秋山は世界中のあらゆる兵書を読み、時には日本に古くからある馬術や弓術のような武芸書や軍書も愛読したという。彼はそれら雑多なものから戦術に応用できるものを引き出すという芸当に非常に長けていた。海戦が海賊に結びつくのも時間の問題だったろう。彼は「能島（のしま）流海賊古法」にたどりついた。南北朝の動乱期、村上水軍が瀬戸内海を制圧していた頃にうまれた戦術書で、秋山はこれを読み「目がひらかれた」と言ったそう。特に彼が感銘を受けたのは、「わが全力をあげて敵の分力を撃つ」という村上水軍の精神であり、そのためには「常に長蛇の陣をとる」という戦術であった。この陣形は応変が聞きやすく

敵の分力を包囲するにも便利で、これが秋山戦術の基幹となり、日露戦争での日本海海戦の陣形となっていくのである。日露戦争において連合艦隊は、「丁字戦法」により海戦史上類を見ない大勝利を収めた。敵の目の前に長蛇の列となつて艦隊が連なる非常に危険な陣形を取りながらも、満を持しての攻撃が功を奏した。まさに海とも

に生きた水軍の知恵が勝利を呼び込んだといつても過言ではあるまい。村上家代々の家訓は、「国家の大事には親兄弟のしかばねを乗り越えて戦え」。瀬戸内海の小さな島々には、今もこの水軍の大きな気概と精神が受け継がれているのであろう。自民党副幹事長村上誠一郎氏は、この誇り高い一族の18代目である。



越智郡宮窪町 能島